

悪の根源をめぐって

——『神名論』第4章18-35節を中心に——

田子多津子

I

『神名論』において個々の神名の考察が始められるのは第4章からである。その筆頭に取り上げられるのは「善」(τὸ ἀγαθόν) という神名であり、これが第4章の主題となっている。しかし、その後半部(18-35節)はすべて「悪」の問題に費やされている。偽ディオニュシオスにおいては、「善」という神名は神を表すのにもっともふさわしい名と見なされている。なぜなら、それはすべてのものの原因としての神を示し、すべてのものは「善」への関与によってこの世界に在るからである。こうした原因としての「善」の絶対性からすれば、「悪」は問題にはなりえないはずである。それでは、なぜ「悪」に対し、「善」という神名そのものと量的に匹敵するほどの叙述がなされているのであろうか。また、偽ディオニュシオスは、すべての悪しきもののアルケーとテロスが「善」である、という一見奇異な言明をなしている(IV, 31, 732B)。これは何を意味しているのであろうか。本稿は、これらの点の考察を目的とするものである。

上記のような偽ディオニュシオスの観点からすると、彼はこの世界に様々な形で悪と言われるものが見いだされることを否定しているわけではない。第4章の「悪」への言及の意図を探ろうとする場合、その導入部において、この世界における諸悪の生起を説明するためにその根源として「善」と対立する固有の原理の存在を主張する人々の見解、つまり善悪の二元論的立場に即した見解が列挙されていることが注目される(cf. IV, 19, 716D-717B)。偽ディオニュシオスはこれら見解に対し、「真なるロゴス」(IV, 20, 717B)として自己の立場を展開するのであり、「悪」を論じる意図はそうした見解を論駁することにあつたと考えられる。すなわち、第4章における「悪」への言及は、直接には、諸悪の根源として「善」と対立する固有の原理の存在

を認める人々に対し、そうした二元論的立場を否定し、究極の原因としての「善」(＝神)の絶対性を擁護しつつ、それとあわせて実は「善」が諸悪の原因ではないことを明らかにし、「善」を賛美することを意図したものと言えよう (cf., IV, 35, 736B)。

さらに、第4章における「悪」への言及は、単に「善」に対する賛美にとどまらず、偽ディオニュシオスの世界観と深くかかわっている。この第4章18-35節については、プロクロスの *De malorum subsistentia* への直接的依拠が指摘されているが¹⁾、世界観との関連でみる場合、偽ディオニュシオスにおける「悪」の問題の考察は、単にプロクロスとの関係にとどまらず、さらにプロティノスにまで遡行してみる必要がある。というのも、偽ディオニュシオス、プロクロス、プロティノスの三者は、一面において、「善」を頂点とし、そこからの発出による階層秩序において世界をとらえ、そのなかで現象的に生起する悪をいかに整合的に解釈するかという問題意識の点で共通しているように思われるが²⁾、他面、質料と悪との関連をどうとらえるかという点でプロティノスと他二者との間に食い違いが見いだされるからである³⁾。

II

Gilson に従えば、『出エジプト記』(3, 14)を根拠として「善」に対する「存在」の優位を主張するキリスト教的発想に対し、「存在」に対し「善」を優位におくギリシア思想の立場がある⁴⁾。プロティノスは「善」の超越性を様々な語を用いて表現しているが、そのなかに *<τὸ ἐπέκεινα τῶν ὄντων>* という表現が見いだされる。これは、プラトン (『国家』VI, 509B) に依拠するものと考えられ、「善」が「存在」を超越するものであることを表している。そして同様の表現がプロクロス、偽ディオニュシオスにも見られるのである。さらにプロクロスは、「善」を「存在」よりも優れているという意味で *<τὸ μὴ ὄν>* とも見なしている (『神学綱要』命題138)。偽ディオニュシオスでは、プロクロスのそうした観点が一層明確化されている。というのも、偽ディオニュシオスにおいては、*<τὸ καθόλου μὴ ὄν>* という表現は「存在を超越する」という意味において (*κατὰ τὸ ὑπερούσιον*) 「善」についてしか用いることはできないとされているからである (IV, 19, 716CD)。このようにみるならば、偽ディオニュシオスにおける「善」の位置づけは、プロティノス、プロクロスと軌を一にするものであり、偽ディオニュシオスは「存在」に対する「善」の優位を主張する立場に与していると言える。

では、偽ディオニュシオスの場合、「存在」に対する「善」の超越性とはどのような意味を有するのであろうか。それは、「善」という神名は万物の原因としてのそれからあらゆるものが発出することを示す、と述べられていることと関連すると思われる (cf. V, 1, 816B)。ここで言われている万物とは、存在者のみならず、非存在者をも含意していることに注目しなければならない。というのも、「善」は存在者 ($\tau\alpha\ \delta\upsilon\tau\alpha$) と非存在者 ($\tau\alpha\ \omicron\upsilon\kappa\ \delta\upsilon\tau\alpha$) の双方に及び、存在者と非存在者とを超越すると言われているからである。これに対し、「存在」($\tau\omicron\ \delta\upsilon$) という神名はすべての存在者に広がり、それを超越すると言われる。つまり「存在」という神名は存在者の原因としての神の側面しか表さないのに対し、「善」という神名は存在者も非存在者をも含むあらゆるものの究極の原因としての神を表すがゆえに、いわばより包括的であり、「存在」という神名を超越しているということになる⁵⁾。

では、ここで言われている存在者と非存在者とは何をさすのであろうか。これについて偽ディオニュシオス自身は特に言及しておらず、彼が直接依拠したとされるプロクロスの *De malorum subsistentia* においても明確に示されていない。そこで手がかりとなると思われるのが、プロティノスの『エンネアデス』I, 8 (「悪とは何か、どこから生ずるのか」) における $\langle\tau\omicron\ \delta\upsilon\rangle$ と $\langle\tau\omicron\ \mu\eta\ \delta\upsilon\rangle$ とに関する叙述である。

プロティノスによれば、 $\langle\tau\omicron\ \mu\eta\ \delta\upsilon\rangle$ とは $\langle\tau\omicron\ \pi\alpha\upsilon\tau\epsilon\lambda\omega\varsigma\ \mu\eta\ \delta\upsilon\rangle$ ではなく、 $\langle\tau\omicron\ \delta\upsilon\rangle$ とは異なるという意味であり、 $\langle\tau\omicron\ \delta\upsilon\rangle$ の「影」($\epsilon\iota\kappa\acute{\alpha}\nu$) のようなものである (I, 8, 3, 6 sqq.)。つまり、 $\langle\tau\omicron\ \mu\eta\ \delta\upsilon\rangle$ とは、存在性の点で $\langle\tau\omicron\ \delta\upsilon\rangle$ よりも希薄ではあるが、究極の根源としての「善」に関与し、またなんらかの仕方では $\langle\delta\upsilon\rangle$ にかかわっており、その限りにおいて、まったく存在性を欠くという意味での $\langle\tau\omicron\ \pi\alpha\upsilon\tau\epsilon\lambda\omega\varsigma\ \mu\eta\ \delta\upsilon\rangle$ から区別されているのである。そしてプロティノスは $\langle\tau\omicron\ \delta\upsilon\rangle$ を可知的世界に、 $\langle\tau\omicron\ \mu\eta\ \delta\upsilon\rangle$ を可感的世界に対応させる。したがって、プロティノスの場合、根源としての「善」を頂点とし、 $\langle\tau\omicron\ \delta\upsilon\rangle$ (=可知的世界)、 $\langle\tau\omicron\ \mu\eta\ \delta\upsilon\rangle$ (=可感的世界) の諸層からなる階層構造が浮かび上がってくることになる。

さらに、こうした $\langle\tau\omicron\ \delta\upsilon\rangle$ と $\langle\tau\omicron\ \mu\eta\ \delta\upsilon\rangle$ との関係は、プロクロスにおいては $\langle\delta\upsilon\tau\alpha\rangle$ と $\langle\gamma\iota\nu\acute{o}\mu\epsilon\nu\alpha\rangle$ の階層関係に対応すると考えられる⁶⁾。というのも、プロクロスは、『神学綱要』(命題87)において、生成するものは完全な非存在ではなく、ある意味で $\langle\tau\omicron\ \delta\upsilon\rangle$ を分有するのであり、その意味においてそれは $\langle\pi\omega\varsigma\ \delta\upsilon\rangle$ だと述べているからである。つまりプロクロスもまた、可感的世界を可知的世界よりも存在

性の点で劣るが、完全な非存在ではないと見なしているのである。先にふれたように偽ディオニュシオスが、「善」は存在者と非存在者の双方に及ぶと述べる場合、「善」の「存在」に対する超越的位置づけの共通性とあわせて、こうした「善」(=*τὸ ἐπέκεινα τῶν ὄντων*; *τὸ καθόλου μὴ ὂν*)—(*τὸ ὄν*) (=可知的世界)—(*τὸ μὴ ὄν*) (=可感的世界) という階層構造がその根底にあると考えられるのである。

III

では、このような階層構造において「悪」はどのようにとらえられているのであろうか。

まず、プロティノスに目を向けてみよう。「悪」を主題とする I, 8 において注目されるのは、彼が、「善に〈善そのもの〉と〈付帯的な善〉があるのと同様に、悪にも〈悪そのもの〉と〈悪そのものが在るがゆえに他のものに付帯している悪〉とがなければならぬ」と述べている点である (I, 8, 3, 22-24)。一面において、プロティノスは「善」が究極の原因であることを強調しながら、他面、諸悪について、それを悪しきものたらしめている悪そのもの、つまり悪の根源を措定し探究しているのであって、二元論と受け取られかねない側面が彼にはあるのである⁷⁾。

プロティノスは、〈*τὰ ὄντα*〉ならびにそれの彼方にあるもの (=「善」) のうちには悪はなく、悪があるとすれば非存在のうち (*ἐν τοῖς μὴ οὐσί*) あると述べる (I, 8, 3, 1-4)。先にみたように、〈*τὸ μὴ ὄν*〉とは可感的世界を意味し、完全な非存在 (*τὸ παντελῶς μὴ ὄν*) ではなく、〈*τὸ ὄν*〉の「影」のようなものではあるが、「善」にかかわっている。それにもかかわらず、なぜ可感的世界に諸悪があるのであろうか。それは、可感的世界がそれに不可欠なものである質料とかかわりを有するためであり (cf. I, 8, 7, 2 sqq.)、可感的世界を〈*τὸ μὴ ὄν*〉たらしめている原因が質料に帰されていると考えられる。またプロティノスは、悪の本質をなすものとして *ἀμετρία*, *ἄπειρον*, *ἀνείδεον*, *ἐνθεές*, *ἀόριστον* 等を列挙するが (I, 8, 3, 13-16)、実は、彼の場合、これらはすべて質料に該当する特性でもあり、そこから彼においては質料が「悪そのもの」(*κακὸν τὸ αὐτό*) と結びつけられることになる。彼によれば、質料の本性はまったく「善」にかかわりのないものであって、「善」の欠如、完全な不足なのであり (I, 8, 4, 22-24)⁸⁾、それゆえに質料は〈*πρώτον καὶ καθ' αὐτὸ κακόν*〉 (I, 8, 3, 39-40)、〈*τὸ ὄντως κακόν*〉 (I, 8, 5, 9) ととらえられているのである⁹⁾。さらに質

料は、いかなる仕方であれそれにかかわるものをそれ自体に似たものとしてしまうとすら言われている (I, 8, 4, 24-25)。したがって、質料は可感的世界の存在性を希薄化し、そこに諸悪を生起させる原因と見なされていると言えよう。プロティノスは、質料と悪との関連について I, 8 以外においても様々に言及しているが、叙述は必ずしも一貫しておらず、その解釈をめぐって様々な議論がなされてきており、質料と悪との関連を彼の思想全体のなかでどのように整合的に理解するかはきわめて困難な問題である¹⁰⁾。しかし、少なくとも上述のような I, 8 の観点においてみる限り、質料に諸悪を生起させる悪の根源が帰されていると考えられるのである。

IV

だが、こうしたプロティノスの見解は先にふれたように二元論と受け取られかねない面を有しており、究極の原因としての「善」の絶対性と抵触する。それに対し、プロクロス、さらに偽ディオニュシオスは、「善」を頂点とする階層構造の点ではプロティノスと共通の立場を取りながら、以下にみるように、悪の根源の存在を明確に否定する点で彼とは異なる見解を提示している。そこには二元論を回避しようとする意図が働いているように思われる。

偽ディオニュシオスは、悪は「善」から生ずるのではない、とまず第一に主張する。先にみたように「善」が存在と非存在双方にわたる原因であることからすれば、悪は「善」から生ずるのではない以上そのどちらでもないということになる。偽ディオニュシオスによれば、生み出し保持するという「善」の本性に対し、悪の本性とは破壊し滅ぼすことである。それゆえ、もし何らかの仕方であらうと想定したとしても、破壊し滅ぼすというその本性がそれ自体に対して発揮されるならば、悪そのものが滅ぼされてしまい、ありえないことになる。また、もしいかなる仕方によらうとすれば、存在する以上、すべての存在者の原因である「善」の配分を有しているはずであるから、それは全面的な悪つまり悪の根源ではありえなくなる。そこで『神名論』第4章21節以降では、世界を構成する階層を一つずつ辿りながら、どの階層にも諸悪の原因としての悪の原理は見いだされることが示されていく。そこでは、神、天使、ダイモーン、魂、非理性的動物、自然、身体、質料といった順序で、すなわち原因である神から世界を構成する各階層を垂直方向に降下しつつ、これらのいずれのうちにも悪はないとされ、「悪の根源は質料のうちにあり」という見解も受け入れら

れないと言われるのである (IV, 28, 729C)。

善・悪それぞれの本性の規定に基づく悪の根源の存在の否定、さらに各階層を上位から下位へと辿りつつ悪そのものの存在を否定していく偽ディオニュシオスの論述は、階層秩序の構成に若干の相違はみられるにせよ、プロクロスの *De malorum subsistentia* のそれ (11-39) とほぼ対応している。そして質料を悪、ひいては悪の根源と見なす立場をしりぞける点でも偽ディオニュシオスはプロクロスに依拠していると考えられる。

プロクロスによれば、質料は生成に不可欠なものであって、善でも悪でもない (*De mal. subs.*, 37, 2-4)。また、『神学綱要』においては (命題72)、質料は、階層秩序の最下層に位置づけられるものでありながら、「善」と同一視される究極の根源「一なるもの」を直接の原因として生ずるものであることが示されている。この点でプロクロスは、Dodds の指摘するようにプロティノスの見解とは明らかに異なる¹¹⁾。さらに偽ディオニュシオスにおいては、「善」 (= 神) はあらゆる意味で原因であり、質料因 (*ἀρχή στοιχειωδής*)¹²⁾でもであるとされており (IV, 10, 705D)、「善」が質料をも含むすべてのものの究極の原因であることが強調されている。それゆえ、彼によれば、すべてのものがそれぞれに応じた仕方でも (*ἀναλόγως*) 「善」に関与するのであって (IV, 20, 720A)、質料もまた例外ではなく、秩序と美と形相に与るとされる以上 (IV, 28, 729A)、質料は悪の根源ではありえないことになるのである。

このように偽ディオニュシオスにおいては、悪の根源の存在は否定されていく。しかし彼は、例えば怒りや欲望や放埒が悪と呼ばれ、可感的世界にそうした諸悪が生起していることを否定するわけではない。では、それらはどのようなものと見なされているのであろうか。そこで注目されるのが、やはりプロクロスに基づくと考えられる〈*παρουσίασις*〉という発想である (cf. *De mal. subs.* 50, 35 sq.)¹³⁾。偽ディオニュシオスによれば、悪は固有の原因から生ずるのではなく、それゆえに〈*ύπόστασις*〉を持たない、つまり〈*παρουσίασις*〉なのであって (IV, 31, 732BC)、そのようなものとして可感的世界に生起する諸悪は付帯的な仕方ではありえない。彼の場合、悪とは万物がそれぞれにふさわしい仕方でも「善」から与えられている善性、すなわちそれぞれに固有の善の〈*ἀσθένεια*〉であり、本来あるべき状態からの逸脱なのである¹⁴⁾。それゆえ、例えばダイモーンの場合には〈*παρὰ τὸν ἀγαθοειδῆ νοῦν*〉、魂の場合には〈*παρὰ λόγον*〉が悪とされているように (IV, 32, 733A)、それぞれの占める階層に応

じて、つまり「善」への関与の程度に応じて、その弱さや欠如から生起する悪の意味するところは異なることになる (cf. IV, 27, 728D; 32, 733A)。

偽ディオニシオスは「神は悪を善として知る」(IV, 30, 729C) と述べるが、これは、これまでみてきたように悪の根源の存在、ひいては諸悪の固有の存在性が否定されてくると密接にかかわると考えられる。そしてその背景には、プロクロスの『神学綱要』(命題124)に提示されている認識論上の原則、すなわち神は認識対象としてのすべてのものを〈ἐνοσιδήσ〉という自己の本性に即して認識するという原則が働いているように思われる。われわれの側からみれば様々な悪が生起しているとはいえ、「善」である神の側からみる限り、悪は〈μηδαμῶς μηδαμῆ μηδὲν ὄν〉(IV, 32, 732D)であり、いかなる意味においても存在せず、「神においては(われわれの次元において)諸悪の様々な原因となることも善を生み出す力として在る」(IV, 30, 729C)。それゆえ、「善」はあらゆる悪しきもののアルケーでありテロスである、とすら言われることにもなるのである。またわれわれの側からは、〈τὸ ὄν〉と〈τὸ μὴ ὄν〉双方の原因である「善」は、原因とそこから結果したものとの次元の相違からして、〈τὸ καθόλου μὴ ὄν〉としてしか語るができないことになるのである。

このようにみると、偽ディオニシオスは、『神名論』第4章後半部において、プロクロスに依拠しつつ、「善」を頂点とする階層秩序のなかで、一方で〈τὸ καθόλου μὴ ὄν〉としての「善」の超越性を明確化し、他方、悪の根源の存在、諸悪の固有の存在性を否定することによって、「善」を〈τῶν κακῶν ἀνάιτιον〉として賛美していると言え、そこにはプロクロスの認識論上の原則もかかわっているように思われる¹⁵⁾。

註

* 本稿では以下のテキストに依拠した。Henry, P. /Schwyzer, H.-R., *Plotini Opera I-III* (editio minor), Oxford, 1964-1982; Isaac, D., *Proclus, Trois études sur la providence III, De l'existence du mal*, Paris, 1982; Dodds, E. R., *Proclus: The Elements of Theology*, Oxford, 1963 (2nd ed.); Suchla, B. R., *Corpus Dionysiacum I, De divinis nominibus*, Berlin/New York, 1990.

- 1) Cf. Koch, H., "Proklus als Quelle des Pseudo-Dionysius Areopagita in der Lehre vom Bösen", *Philologus*, 54, 1895; Stiglmayr, J., "Der Neuplatoniker Proklus als Vorlage des sogenannten Dionysius Areopagita in der Lehre vom Übel", *Historisches Jahrbuch*, 1895.
- 2) Cf. Müller, H. F., "Dionysios. Proklos. Plotinos", *Beiträge zur Geschichte*

- der Philosophie des Mittelalters*, Bd. XX, Heft 3-4. 1918, S. 1-110. bes. S. 21 sqq.
- 3) Cf. Beierwaltes, W., "Entfaltung der Einheit: Zur Differenz plotinischen und proklischen Denkens" im *Denken des Einen*, 1985, Frankfurt am Main, S. 155-192, bes. S. 182 sqq. Beierwaltes は、プロティノスとプロクロスの思想の相違が顕著に現れている点の一つとして、悪の根源をめぐる両者の見解を取り上げている。
- 4) Cf. Gilson, É., *L'Esprit de la philosophie médiévale*, Paris, 1943, p. 55. トマスは『神学大全』I, q. 5, a. 2 において、「善」と「存在」との位置づけを取り上げ、「存在」が概念的に「善」に先立つと主張するが、その異論のなかで偽ディオニュシオスに言及している。
- 5) Cf. 熊田陽一郎、『美と光』（国文社、1986）、pp. 97-98.
- 6) Cf. Dodds, E. R., *The Elements of Theology* p. 232.
- 7) グノーシス派に対する反駁との関連で、プロティノスの悪についての見解が初期の著作と晩年の著作とでは変化していると主張する研究者もいる。Cf. Puech, H. C., "Plotin et les Gnostiques", *Entretiens Hardt 5, les Sources de Plotin*, Geneva, 1960.
- 8) 質料と欠如との関連づけは、アリストテレス『自然学』（192a）等にもみられる見解に基づくものと考えられる。プロティノスの質料論とアリストテレスのそれとの関連については、内藤純郎、「プロティノスの質料論(1)」（『哲学誌』12, 1970, pp. 51-60）参照。
- 9) 質料を主題とする II, 4 においても、質料は「善」を欠くがゆえに〈κακόν〉であると見なされている (cf., II, 4, 16 sqq.).
- 10) プロティノスにおける悪と質料との関係についてのプロティノス研究者の諸見解は、田之頭安彦、「プロティノスにおける素材と悪——その矛盾と解決——」（『東京学芸大学紀要 2 部門』23号, 1972, pp. 18-58）において、五つに分類され、検討されている。
- 11) Cf. Dodds, E. R., *op. cit.*, p. 239.
- 12) Cf. Lampe, G. W. H., *Patristic Greek Lexicon*, s. v. 〈στοιχειωδής〉. ただし、プロクロスにはこうした表現はみられない。
- 13) Cf. Isaac, D., *op. cit.*, notice, pp. 13 sqq.; Beierwaltes, W., *op. cit.*, S. 188 sqq. さらにプロクロスにおける〈παρῳπίστασις〉については、筆者は未見であるが、Lloyd Antony, C., "Parhypostasis in Proclus" in *Proclus et son influence. Actes du colloque de Neuchâtel, juin 1985*, éd. par Boss G. & Seel G., Zürich, 1987, pp. 145-157 がある。
- 14) Cf. Mühlberg, E., "Das Verständnis des Bösen in neuplatonischer und

frühchristlicher Sicht", *Kerygma und Dogma*, 15, 1969, S. 226-238, bes. S. 229-230.

- 15) この認識論上の原則は〈*πρόνοια*〉と密接にかかわるものであり、『神名論』第4章33節等に見られる偽ディオニュシオスの〈*πρόνοια*〉の言及とプロクロスの〈*πρόνοια*〉観がどのように関連するかは、別途検討しなければならない。